

第4回 「鳥取県鳥取市」 あおやかみじちいせき —青谷上寺地遺跡— (遺稿)

結核予防会会長 青木 正和

鳥取市から米子市方面に向かう山陰道を改善するために計画された高架道路「青谷・羽合道路」の建設に先立って、1991（平成3）年に行われた事前調査で土器などが散布していることが発見され、1996-97（平成8、9）年に青谷町教育委員会が実施した試掘調査では弥生時代の遺構・遺物が確認された。早速、県の教育文化財団が1998（平成10）～2001（13）年に発掘調査を行ったところ、弥生時代の大規模な遺跡があることが明らかになった。遺跡は極めて広汎で今後も調査が行われるであろうが、出土品は既に数万点にのぼり、200体以上の人骨も発見された。その中に弥生後期のものと判断される2例の脊椎カリエスを示す人骨も発見された¹⁾のである。

青谷上寺地遺跡の結核例が発見されるまでは、わが国で最も古い結核例は、現在は国立長寿医療センター研究所所長をされている鈴木隆雄先生²⁾がかなり以前に全国の古人骨2,000体以上を精力的に調べて発見された、①千葉県小見川町城山古墳の壮年男の腰椎結核（6世紀）、②宮崎県西諸県郡高原町旭台地下式横穴の熟年男性の胸・腰結核（6世紀）、③東京都大田区鶴の木1号墳の50歳代女性の胸・腰椎結核（6世紀後半～7世紀前半）の3例とされていた。つまり、「結核菌は6世紀から7世紀にかけての古墳時代後期に、渡来人により大陸からもたらされた」という鈴木説が定説で、結核菌が日本に侵入したのは、今から1400～1500年前と考えられていた。わが国では縄文・弥生時代の人骨は全国で多数発見され調査されているが、上記の3例を除いて結核例は無かったのである。これが

青谷上寺地遺跡での発見で一挙に約300年遡ることとなったのである。

脊椎カリエスの骨は今から2500～5000年前のエジプトのミイラで発見されており、最近、この結核病変からDNA分析で結核菌が確認³⁾されている。さらに結核菌の仲間である牛型菌、アフリカ型菌などのDNA分析の結果から推定すると、結核菌はおよそ4万年前に出現したと推測されている。アフリカの奥地で誕生した結核菌はその後、人から人に感染し、その人達の移動に伴って世界各地に拡がっていくが、「東アフリカ・インド株」「ハーレム株」「北京株」などDNAの一部がごく僅か変化したいくつかのグループとなり各地に広がった。日本に侵入してきた結核菌は恐らく北京株に罹患した大陸人が1800年前頃にわが国に渡来して入ってきたこととなる。

青谷上寺地遺跡は弥生時代前期末（約2200年前）から古墳時代前期の初め（約1700年前）にかけて存在していた集落の遺跡である。出土した板に「大小さまざまな船で船団を組んで航海した絵」が残されているし、大陸や日本各地から海を介してもたらされた品々が多数発見されているので、青谷は弥生時代の交易拠点であったと考えられている。青谷では農耕稲作も木製の農具などを用いて行われ、田んぼを開墾するための鋤や鍬、稲穂をつみ取る石包丁、さらに大量の米も出土している。

人骨の人類学的計測の結果、弥生時代には縄文人との混血が進んで弥生人となり、人口もかなり増加したと推定されている。考古学者の推定では年間1,000人にもなる人々が毎年大陸から渡来し、新しい文化が移入されたと推定されている。青谷上寺地遺跡の集落はこういう弥生時代に、まさに新文化の取り入れ口の一つとして栄えた集落だったのであろう。日本の結核がすべてこの1例の渡来人から拡がったと考える訳ではないが、青谷の1例を含む結核に罹患した渡来人、あるいは大陸の人と接触して結核に感染した弥生人により、約1800年前に青谷を含



日本で最も古い脊椎カリエスの症例
(青谷上寺地遺跡展示館)



人骨の出土状況



人骨類が出土した青谷上寺地の溝状遺構はこの県道の下に位置していた



白兔神社

む日本海岸のどこか、あるいは数カ所から結核菌が日本に侵入したことは事実だろう。

現在は鳥取市に編入された青谷の町には勝部川と日置川の2本の川が流れ、北は日本海に面しているが、他の三方は山に囲まれている。弥生時代には入江は深く、その入り口には砂丘があり、水深が浅い穏やかな内湾に面し、大規模な護岸設備を伴う溝で囲まれていた。こうして青谷は稲作、狩猟、漁業と共に、日本海沿岸の各地や大陸との交易拠点として弥生時代には栄えていたと推定される。その後、「倭国の大乱」で滅びた後は、長い間に川の氾濫などで埋められ、このような低湿地特有の環境のため、田圃の下にあった遺跡の保存状態は極めて良く、他の遺跡では見られなかった多くの人骨、動物の骨、多種類の品々が発見され、弥生時代の生活・文化について多くの新知見が得られたのである。今は遺跡は埋め戻されているが、高架の山陰道が縦断している田圃のあたりが弥生時代の中心域であった。

第61回結核予防全国大会が成功裡に完了した日の午後、発掘のニュースを聞いた時から一度は訪ねたいと10年余考えていた青谷上寺地遺跡を訪ねる機会を持ち、今は平和な農村の遺跡の上に立ってわが国の結核1800年の歴史に思いをめぐらし、誠に感無量の思いであった。

なお、青谷上寺地遺跡を訪ねる前に、鳥取駅と青谷遺跡のほぼ中間にある「因幡の白兔」の伝説で有名な「白兔神社」にお参りした。「わに」を騙して海を渡り、渡り切ったところで「騙した」ことを告げたために怒った「わに」によって白兔の皮は赤むけにされ、初め相

談した大国主命の兄に騙されてさらに酷くしてしまった。

これを見た大国主命は白兔に「ここにある池で体を洗い、蒲の穂を敷き詰めた上で転々として治しなさい」と教え、白兔がそのとおりにすると完全に治ったという。その白兔を祭った白兔神社が白兔海岸にあり、今も神社には「不増不減の池」と言われる池があり、干天・豪雨でも水の増減がないという。白兔神社は今では「日本医療発祥の地であり、古来病気に靈驗あらたかの神様」とされ医療関係者のお参りが多いという。弥生時代から神話の世界まで、「結核菌の侵入」から「医療の発祥」までを心に刻みこまれた印象深い小旅行であった。

文献

- 1) 井上貴央, 青谷の骨の物語。(財)鳥取市社会教育事業団発行, 今井書店鳥取出版企画室発売. 2009年刊
- 2) 鈴木隆雄, 我が国の結核症の起源と初期流行についての古病理学的研究・376-396, 埴原和郎編「日本人と日本文化の形成」朝倉書店, 1993年刊
- 3) Zink AR, Sola C, Reischl U et al. Characterization of *M. tuberculosis* Complex DNAs from Egyptian mummies by spoligotyping. *J Clin Microbiol* 41; 359-367: 2003

謹んでお知らせいたします。青木正和会長は、この原稿を執筆後の5月29日、くも膜下出血により逝去いたしました。ここにご冥福をお祈りいたします。